

牧師 山本護 司式 渡部敬子 奏楽 花曲琴音

前奏	黙想	祈禱	
讚美歌	23 くるあさごとに	讚美歌	354 かいぬしわが主よ
祈禱		献金	
信仰告白	使徒信条 566	讚詠	547 いまささぐるそなえものを
聖書	詩編 8:4~5 マタイによる福音書 18:12~13	黙禱	
讚美歌	298 やすかれ、わがこころよ	主の祈り	564
説教	『詩人と羊』	頌栄	544 あまつみたみも
		祝禱	後奏

「神と悪魔が闘っている。そしてその戦場こそは人間の心なのだ(カマーズの兄弟)」。これはカリカチュアとして描かれる神の論し/悪魔の誘惑とは違う。一晚中死に物狂いで格闘していたヤコブと神のように(創世:25~27)、くんずほぐれつで、どれが神の腕で、どれがヤコブの脚か、分らない状態だ。

神は宇宙を創造し、創造したものを統べ給う(詩編 8:4)。「そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは(8:5)」。人間とは何か、という根源的な問い。人間存在を喜べる時には、神の御心が現われたと思うだろう。逆に人間の残虐さに遭遇すると、悪魔の所業だと目をそむけるだろう。このような人間とは、何なのか。

ダビデの名によるこの詩は、人間を明るく優れた存在と捉えている(8:6~7)。ところが同じダビデの名を冠しながら、己が罪に恐れおののく詩もある(51:5~7)。こうした人間のふり幅を承知しながら、詩人は感歎をくり返す。「人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう(8:5)」と。

詩人は「神に僅かに劣るもの(8:6)」である、徳の高い人間ばかりを「何ものなのか」と問うているわけではない。背きと罪にまみれた(51:5)、おぞましい人の子ばかりを「何ものなのか」と問うているわけではない。それでは、この詩の焦点はどこにあるのか。神が人間を「御心に留めて」くださり、人の子を「顧みて」くださっていることこそが奇跡であり、発見であり、この心身に調和を感ずる。人間とは何か。人間側の多様なふり幅は答えではない。神が顧みてくださる存在、それが人間なのだ。

私たちがどうあろうとも、神は私たちを御心に留めていてくださる。私たちが神を忘れ身勝手にふるまっていようとも、神は私たちを顧みてくださる。その神の顧みを肌を感じていることが、どれほど私たちの支えになることか。歩き始めた子供が、父や母の視線を確かめながら大胆な冒険をしていくように、神の御心に留められ顧みられることで、私たちはときめきながら自分の領域を超えていく。

よく知っている福音書の記述に、少し違った角度から光が当たる。迷い出た羊のたとえ。「ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、99匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか(18:12)」。一匹のために捜しに行くだけでなく、「それを見つけたら、迷わずにいた99匹より、その一匹のことを喜ぶだろう(18:13)」。羊は群れにいてこそ安定する動物。だがその一匹は羊飼いたるキリストの顧みに敏感で、群れを離れて森を越え未知の草原まで冒険した。ところが、自分が迷子だと気づき恐怖に陥り、やがて見つけられる。叱られると思いきや、キリストは自分のことで大喜びしているではないか。羊は驚き、安堵し、涙し、いかに愛されているかを初めて経験する。

「迷い出た羊のたとえ」はルカ福音書にもあるが、そちらは「一匹を見失った(ルカ 15:4)」と羊飼いの側の責任。だがマタイ福音書では「一匹が迷い出た(マタイ 18:12)」と羊の試みが発端。つまり前者は教会としての立場。後者は無茶な主体性の末に、キリストに発見されて自分自身の何たるかに出会った。詳しく言えば、出会った自己の内にキリストの深い愛をしみじみ感じた。キリストの顧みで冒険し、孤独に恐怖し、キリストに見つけられ、愛の深さをこの身に覚える。私たちはどんな一匹の羊なのか。

神の御心に留められ顧みられている 環境に限定されない 沙漠でも 樹林帯でも 巨大都市でも 絶好調でも独りぼっちでも キリストに「見つけられ続けて」いる 見つけられ大喜びされている

8/31(水)11:00~12:00 聖書研究会、どなたでも御参加下さい。先週から毎月曜夕刻のダルク NA ミーティングが再開しました。次主日9/4は礼拝後に役員会。月報「いき」への寄稿、募集中です。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。